子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2007年7月　NO.138

「チューリップ」　中山　康子

〈もくじ〉

土佐反骨の風は、共に生きる誠意 …… 山根洋右　2
四十年前のお祭りの日にタイムトラベル …… 横矢真理　3
桜座演劇講座　桜座で『演劇』やってみませんか――。
　「文教のまち」に演劇文化を根付かせたい …… 横山　覚　4～5
砂浜美術館　二十九文字のコンセプト …… 村上健太郎　6～7
夏の過ごし方　夏ばての予防と漢方 …… 小松　一　8～9
地の名も無き偉人たち④
　裁判干渉に抵抗、安重根を支えた検察官 …… 公文　豪　10
スペインの素顔3～サン・セバスティアンの章～ …… 門田　彩　11
言葉の現場から④ …… 西岡寿美子　12
五～六月の事業のご報告 …… 13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

土佐反骨の風は、共に生きる誠意

山根洋右

土佐の科学者

寺田寅彦の手入れの行き届いた旧居で、彼が使用した文机の前に座り、庭を眺めながら贅沢なほど、ゆっくりと流れる一時を過ごす。夏目漱石から、「あなたは、どの領域でもノーベル賞がとれる」と評された彼の人生誌には、現代が喪失している科学と芸術の見事な融合が見られる。専門の地球物理学の上に立って、地形・地質・気象・動植物・人種・民族・芸術・宗教などを地球的な視野でとらえ、日本人の特性を「複雑な自然と共生してきたこと」と結論づけている。

寺田寅彦の足跡は、本来、学問とは知識ではなく、態度であり、価値観であり、感性であることを示している様に思われる。

最近、日本の高等教育が市場主義原理の中で、競争主義、成果主義に没入していることを憂い、あらためて寺田寅彦の偉大さを思う。

土佐の反骨精神

土佐人の凄さは、幕末から明治維新、自由民権運動の政治舞台を「一領具足」の様に駆け抜けた疾風怒濤の様な烈しさと行動力と無欲さにあるように思う。そのあこがれの土佐に来て、三ヶ月。身辺の若い女性の仕事ぶりを見るにつけ、物の見方、考え方の切れ味の良さに爽快さを感じる。ご高齢の方々の中には、室戸岬の水軍の侍大将の様な迫力と風格を持っている女性も多い。作家倉橋由美子氏は、随筆の中で、「土佐の女性は、淡麗辛口である。決して、男勝りではなくて、むしろ男性を立てながら、男性以上の仕事をさりげなく片づけてしまう」と述べている。

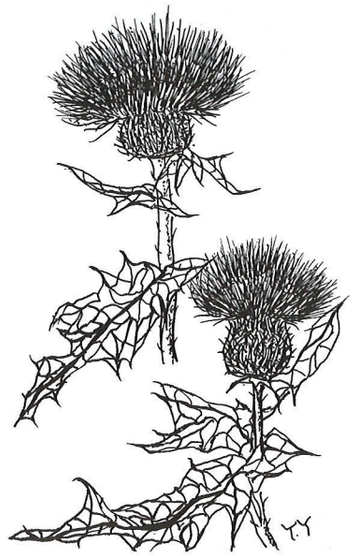
土佐をこよなく愛している司馬遼太郎氏はエッセイ「土佐の高知で」の中で語っている。「帯屋町のあたりの喫茶店でぼんやり道ゆくひとをみていると、どの土佐人の感じも、私が知っている戦国時代や幕末、自由民権運動時代の土佐人とすこしもかわらないような気がする。……かれらが明治初年に人となって居れば自由民権運動に挺身するであろうし、幕末に生きていれば脱藩して京で奔走しているであると思われてくる。こういう思いは、他の土地ではしない。歴史も人間風土も今に連続していると感じられるのは、日本にあっては京都と土佐のみである」。

土佐の郷土史に興味を持って手にした『ふるさと昭和の証言』（入交好保著　一九八七年高知新聞社刊）でも、まことに、この土佐人の反骨の風景が透けて見える。野村茂久馬、林譲治、吉田茂、荒畑寒村の指導を受けた安芸盛とともに、著者自身も坂本龍馬が乗り移ったかと思うばかりの波乱に富んだ人生史である。

究極、土佐の反骨の風は、現代の日本を覆う〝生きることへの倦怠と人間疎外、野獣化〟に挑戦する草の根に生きる者同士の〝共に生きる誠意〟の発露ではなかろうか。

すずしさや膝の真上の天の川　　子規

（やまねようすけ／高知女子大学学長）



四十年前のお祭りの日にタイムトラベル

横矢真理

上京して三十六年。四月に母方の大叔母である武政春子が亡くなり、高知が遠くなったようなさびしい気持ちになっていた時に、偶然この記事を執筆する話をいただき驚きました。仕事について書くはずでしたが、これもご縁だと思いますので、少し思い出話をさせてください。

私の記憶の中の「武政のおじちゃん」武政英策は、いつもベレー帽をかぶってニコニコ笑っている愉快な人でした。私が「よさこい祭り」の踊り手だった時に、本部の高い場所にある審査員席から「真理ちゃ～ん！」と、身を乗り出して大きく手を振ってくれていた姿が、今も見えるようです。当時父の歯科医院があった商店街のチームに参加した私は小学校一年生だったでしょうか。美容師だった父方の祖母に特別に花嫁さん用のお化粧をしてもらって、素敵な女性に変身したつもりの私は、きれいに踊ろうと鳴子の先まで神経をつかっていました。そしてお花を首からかけて欲しくて必死！　そんな私を一瞬にしてリラックスさせてくれたのが、おじちゃんの笑顔でした。後で「あんなにたくさん人がいたのに、よくみつけたでしょう！」と笑いながら話してくれましたっけ。凄い熱気の中、踊り終わってカルピスをもらって飲んだ時の爽快感や、知らない街を踊り歩いた時のあのワクワク感は忘れられません。

武政英策（後列中央）

写真は、ちょうど同じ頃、母が私に書いてくれた童話の本の出版記念パーティーの時のものです。じっとしているのが嫌いな私は変な顔をしていますが、武政のおじちゃん夫婦と、その右に川柳家だった母方の祖父、横山青果、そして両親と妹が並んだ大事な写真です。この原稿のおかげで母とも思い出話をしたのですが、武政のおじちゃんはおばちゃんと結婚して間もない頃から「高知にも大きなお祭りを作りたい。鳴子を使う踊りにしたいと思うがどうだろう」と祖父に相談していたそうです。祖父は、大きな話をする奴だけど、なかなかおもしろいことを考えると感心していたと言います。

その後、多くの人の想いが実ってよさこい祭りが生まれ、大きなお祭りになり、そして全国に広がりました。私の住む東京のスポーツセンターでもＹＯＳＡＫＯＩソーランの稽古をしているチームがいます。鳴子の音が聞こえてくると胸がきゅんとなって立ち止まってしまいます。お祭りの形は変わっても、武政のおじちゃんはきっと空の上からニコニコ顔で見ているでしょう。ミュージカルも、おばちゃんと一緒に楽しみにしているに違いありません。

私は今、子どもが犯罪や事故に遭わないためには何をすべきかを講演する仕事をしています。どこにでも溶け込める性格で重宝されており、一昨日は沖縄、今日は群馬、明日は新潟と全国を飛び回っていますが、私が高知出身だと知った人から、「なるほどハチキンだ！」と言われるのが喜びです。十年しか暮らしていないけれど、高知の女性の特徴は遺伝子に深く刻まれているのでしょう。

私たちの研究所のモットーは、「無暗に怖がらず、立ち向かえる親子になろう！」。どんなことをしているのかは、ホームページ「子どもの危険回避研究所　http://www.kiken-kaihi.org」を一度覗いてみてやってください。四年前には、高知県警の「高知安全安心まちづくり実践塾」の講師もさせていただきました。また高知に呼ばれる日を楽しみに待っています。

（よこやまり／ＮＰＯ法人 子どもの危険回避研究所所長）

■■■ 桜座演劇講座 ■■■

桜座で『演劇』やってみませんか――。

「文教のまち」に演劇文化を根付かせたい

横山 覚

▼初舞台に感激の涙

「桜座で『演劇』やってみませんか――。」

この呼びかけをそのままタイトルにしたチラシを作成し、佐川町を中心とした高吾北地域で「桜座演劇講座」の受講生募集を行ったのは昨年五月のことでした。

集まった受講生たちは年齢も職業も様々で、そのほとんどに演劇経験のない二十八名。そして十ヵ月後の今年三月二十一日、桜座の舞台袖には、溢れる緊張感に押しつぶされそうになりながら、開演ブザーを待つ受講生たちの姿がありました。

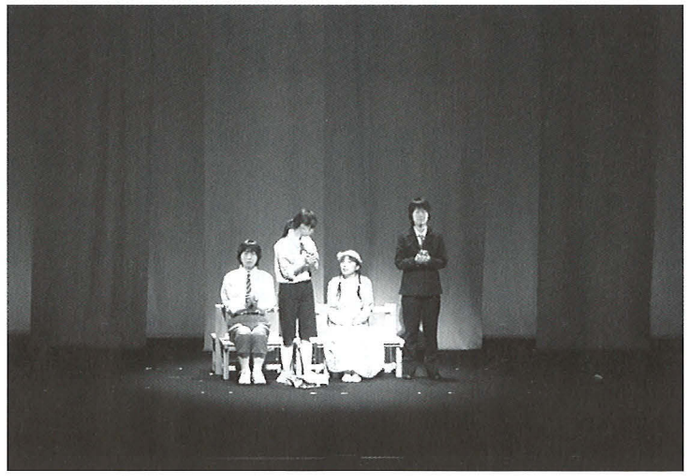
講座開始からほんの十ヵ月、当然、演技は未熟ですし、発声も声量もまだまだですが、毎週一～二回の練習をこなしながら、「演じることを楽しんでみよう!」を合い言葉に、真摯に演劇に取り組む姿には感動を覚えたものです。そして、とうとうその集大成を発表する日がやってきました。

上演作品は、あの有名な宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」。開演前の胸の高鳴り、後には引き返せないという気持ちが、否応なしに緊張感を高めていきます。加えて、予想をはるかに超える約二百人もの来場者……。終演後の舞台上には、友人や知人から渡された花束を胸に、こぼれ落ちる涙を手で拭いながら、達成感と安堵感に満ちあふれた受講生たちの晴れやかな顔・顔・顔。受講生が初めての大舞台であれば、桜座も初めての取り組みでした。心配と言うよりは、体当たりで臨んだ「銀河鉄道の夜」でしたが、館を後にされる観客の方々の表情から大きな手応えを感じた初舞台となりました。

▼文化の殿堂「桜座」開館

勤王の志士・宮内大臣　田中光顕、植物学の父・世界のマキノ　牧野富太郎、ブラジル移民の父　水野龍、すい星発見者・山崎鏡の山崎正光、推理小説の草分け　森下雨村、「セルボーン博物誌」の訳者　西谷退三、「緑の地平線」の歌手　楠木繁雄、オペラ界の重鎮　下八川圭祐、小樽運河建設功労者・工学博士　広井勇、そして近年では、漫画家　黒鉄ヒロシ、直木賞作家　坂東眞砂子……。まだまだ枚挙にいとまがありませんが、これらの人々が全て当佐川町から輩出された人物であり、当町が「文教のまち」と呼ばれる所以になっているところでもあります。

加えて、土佐藩の筆頭家老深尾家一万石の城下町としての由緒のある歴史―。このような伝統的、文化的風土を基盤とする当町に、平成十年、まちの文化の殿堂として佐川町立「桜座」が建設されました。



「銀河鉄道の夜」公演

そして、開館から今年で九年、今では、町はもとより、高吾北地域で文化活動を展開しているたくさんの文化団体や文化サークルのご利用をいただき、桜座からは年中文化の香りが地域に広がっています。

▼「文教のまち」に演劇文化を―

桜座の貸館施設は、四百人収容の大ホールをメーンとして、ダンス、楽器演奏、各種会議に使用できる多目的練習ホール、バンド練習専用のスタジオ、および十畳ほどの和室よりなっています。そして、これらの施設では、音楽会、舞踊会、吟詠会、映画会を始め、カラオケ大会や各種発表会・講演会など様々なジャンルの練習や発表会にと、大勢の地域の皆様が主体となったご利用をいただいています。

平成19年度「桜座演劇講座」練習風景

しかしながら、このように様々なジャンルにおいてご利用をいただいているにも関わらず、「演劇」の分野においては、これまで利用が皆無であるというのが現状でした。

こうしたことから、桜座では、「文教のまち」と言われるこの町に演劇に親しむ集まりがあってもいいのではないか、また、この地域に市民劇団のような団体があれば、なお一層地域の文化度も高まり、厚みも増すのではないかとの考え方をもとに、「この地域に演劇文化を根付かせたい」、そして、「高吾北地域で唯一本格的な舞台を備えた桜座」を演劇によって一層の活用を図っていきたいとの思いを強くする中で、昨年度より、将来的には劇団創設も視野に入れた取り組みとして「桜座演劇講座」を開講いたしました。

このように桜座演劇講座は、地域の方々からの要望から生まれたものではなく、また、演劇経験者など講座の核になる人材もいない中、「この文教のまちに、この高吾北の地域に演劇文化を根付かせたい」という桜座の思い入れにより出発したところですが、幸いなことに、快く講師を引き受けていただいた指導者（昨年度講師＝高知演劇ネットワーク、本年度講師＝演劇センター'90主宰帆足寿夫氏）の方々や、募集に積極的に応募いただいた受講生の皆さんのお陰で、昨年度に続き本年度も当講座を開講することができました。

▼演劇の持てる力を地域づくりに―

特に本年度の演劇講座においては、役者だけではなく、演出家や脚本家、劇団スタッフに興味関心のある方にも参加をして欲しいとの呼びかけを行うなど、将来の劇団の立ち上げを見据えた取り組みにも配慮をしていますが、人づくりには相当な時間を要することもあり、「劇団の立ち上げ」という大きな夢は、やはり一朝一夕には叶いそうにないというのが実情です。

このため、桜座が思い描き、目指している「地域の役者が、地域の題材で作られた演劇を、この桜座の舞台で、地域の皆さんに披露する」という、こんな日が訪れるのは、まだまだ遠い先のことだとは思いますが、実現できれば、演劇というものをとおして、地域の伝統文化や歴史の再認識、また、地域の良さの再発見ができると思いますし、このことがひいては地域を愛する心につながっていくのではないかと思います。

桜座は、この演劇講座が地域の人々に愛され、応援していただける地域の劇団として発足できるよう更なる取り組みを進めていくとともに、演劇の持てる力を人づくりや、地域づくりにつなげていきたいと考えています。

今まで演劇については何の関わりもなく、何の素地もない田舎の小さなホールが取り組む「演劇講座」ですが、文教の地と言われるこの地域に劇団が旗揚げされるその日を夢に見ながら、粘り強い取り組みを進めていきますので、皆様のご指導とお力添えをよろしくお願い申し上げます。

（よこやまさとる／佐川町立「桜座」館長）

砂浜美術館

二十九文字のコンセプト

村上健太郎

「おばちゃん、会いに来たよ」

ここ数年、夏になると、この町の山奥の集落に、町外から若者たちがやってくる。顔馴染みのおばちゃんたちに挨拶をすると、「元気やったかえ、ようきたね」と元気のよい返事が返ってくる。この地域の夏祭りに参加し、地元の人たちと踊り、夏の夜を楽しむ。高齢化率が高いこの町で、祭りに参加する若者たちはひと際目をひく。彼らは、砂浜美術館で開催する「Tシャツアート展」にボランティアで参加をしてくれた若者たちである。

砂浜美術館は、「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」というコンセプトのもと、一九八九年から活動している。場所は、高知県黒潮町。大きな観光施設があるわけではない。「何ちゃあないけど、心が癒えるだろう」そんな場所である。

観光ガイドマップを手に、砂浜美術館を訪れる人がいる。「今、砂浜にいるのですが、砂浜美術館はどちらですか」そんな電話が事務所にかかってくる。「今立っておられるところが砂浜美術館です」事務局のスタッフは答える。建物があるわけではない。「あ、そういうことなんですか」と笑いながら理解してくれる人と、納得がいかないようで、少々不機嫌になる人もいる。館長は土佐湾を泳ぐニタリクジラ。

あるのは、地元の人にとっては見慣れた風景。地域の資源を、遊び心をもって見つめ、価値を見出す。砂浜に流れ着く漂流物も、迷惑なものだと思って燃やしてしまえばただのゴミだが、流れてきた旅に思いを馳せたり、収集してみると、その人にとっての宝物になることがある。長さ四キロメートルにわたる砂浜が砂浜美術館のメインフィールド。流れ着く漂流物や、鳥の足跡、砂浜で遊ぶ子ども達が作品。二十四時間三百六十五日オープン。BGMは波の音。照明は月の光。その考え方が「砂浜美術館」。

砂浜美術館が生まれたのは今から十八年前。一九八九年、町主催の「松原サミット」に向けての企画の中に、「Tシャツアート展」があった。それは写真家の北出博基氏の作品をTシャツにプリントして、ちょうど洗濯物を干すように展示するという内容だった。この企画を持ち込んだ、高知在住の梅原真氏は、Tシャツアート展を行うにも、しっかりした考え方が必要であることを強調した。話を聞いた地元の行政職員は、「面白いことをするから」という誘い文句で仲間を集め、企画を練った。一見目新しいイベント。マスコミが取り上げそうなビジュアルだが、目新しさだけで開催しても、その場限りの一過性のイベントで終わってしまう。やるからには、そのイベントを行うための考え方が必要だ。そのことは、当時青年団活動をしてきた地元のものたちが、イベントを繰り返す上でも感じていたことだった。考える中で、「別にTシャツや砂の彫刻だけが作品と考えなくても、沖を泳いでいるクジラも、松原も、みんな作品として考えたらええと思う」という発想がでてきた。そこから、「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」というコンセプトができ、砂浜美術館が始まった。このコンセプトを伝えるために、Tシャツアート展を行うという考えにいきついたわけである。

砂浜美術館が始まって以来、このコンセプトは様々な形で具現化されていった。「Tシャツアート展」に続き、浜に流れ着いたゴミを展示する「漂流物展」、砂浜沿いの松原にパッチワークキルトとぞうきんを展示する「潮風のキルト展」。らっきょうといえば「漬物」という常識を覆した「らっきょうの花見」。大人の砂遊び「砂の彫刻」。どれもが、地域に当たり前にある資源を、見方を変えて楽しみ、美術館の作品にしてきた。

砂浜美術館の活動は、多くの人たちに支えられている。Tシャツアート展では、実施する中で、「全国にボランティアを募ったらどうだろう」という案がでてきた。スタッフ間でも、「本当に集まるだろうか」という不安の中、初めての年、京都・大阪・東京から七名の若者の参加があった。当時のスタッフは、驚いたと言う。募集をしておきながら、まさか集まるとは思っていなかった。約十日間町内に滞在、交通費や宿泊費は自己負担。今までの固定メンバーでの運営に、新しい風が吹き込んだ。新しいアイデアも生まれた。彼らは、単に言われたことを手伝うのではなく、自分たちがこのTシャツアート展を作り上げるという気持ちで、イベントを盛り上げた。

こうした若者たちがこの地域の自然にあこがれて、ここで生活する人の魅力にとりつかれて、何度も訪れるようになった。そして、地元の人と交流するだけではなく、様々な才能をもつボランティアは、それを生かす場所として黒潮町を選び、企画とその実践をすることで地域と交流するという新しいスタイルを生み出した。

例えば、ボランティアの中に建築家を目指している青年がいた。彼は、ボランティアに参加後、仲間とともに一つの新しい提案を行い、実践をした。それは、「初夏のぶらぶらしませんか」という企画だった。

旅をしていて、列車の車窓に美しい風景が広がった時、「降りてみたいな」と思うことがある。この「ぶらぶらしませんか」はそんな願いを形にした、新しい旅のスタイルだった。車の利用率が高いこの地域では、ローカル線の利用者は減少傾向にある。当然、駅周辺も活気が薄れている。Tシャツアート展の会期中、会場の最寄の駅より三駅手前の、普段は普通列車しか停車しない「海の王迎駅」に、臨時の特急列車を停車させた。駅を降りると、駅名のとおり百八十度の視界いっぱいに海が広がる風景に出合う。お客さんは、その駅からTシャツアート展会場までのおよそ四キロメートルの道を、ガイドマップを手に、地元のボランティアガイドとぶらぶら歩く。砂浜ぞいのコースで、潮溜まりにいる生き物に触れてみたり、天日塩を作っている施設を見学したり、それぞれのペースで歩きながら、その人なりの砂浜美術館の作品を見つけていく。この企画は、少しずつ内容を充実させながら、次の展開を模索している。

砂浜美術館には課題もある。ふと地元に目を向けると「地域との温度差」を感じる場面が多々あった。地元の人のイベントへの作品応募、来場、ボランティアはわずかであった。「地元の人たちにこのコンセプトを伝えることが出来ているのだろうか」という課題。これは現在も解決できたわけではない。

しかし、町外からボランティアで訪れる若者たちの楽しそうな姿をみて、地元の人たちも、「あ、自分たちの町は、実に魅力のある町なんだ」、と少しずつ気づき、交流を楽しむ人たちも増えている。ボランティアの受け入れを始めてから三年目、地場産品を活用した集落再生に向けた取り組みを行っていた、蜷川という集落の女性グループ「であいの里」に、彼らの宿泊・食事の世話をお願いした。黒潮町蜷川集落は、国道から五キロメートルほど入った中山間の小さな集落で、世帯数約百六十戸、約四百人が暮らしている。国体をきっかけに女性グループが中心となり、活動を始めた。蜷川地区は子どもが年々減少し、数年前から地元小学校が廃校になっており、ここを改築し、活動の拠点としてその活用を模索していた。それぞれが、本業を持って忙しく仕事をしている。特に、Tシャツアート展が開催される五月上旬は忙しい時期だが、ボランティアの受け入れを快く引き受けてくれた。こうして、その後ボランティアと地元住民を結ぶ新たな展開が始まった。冒頭の若者たちは、この蜷川地区の祭りに訪れる。

この町の一人でも多くの人が、「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」という、かけがえのないこの二十九文字のコンセプトで、自分たちの地域や生活が少しでも楽しく、面白くなり、町外から訪れるファン達と素敵な出会いをしながら、地域を作っていきたいと思う。そういう私も、今から五年前、砂浜美術館の活動、この町の人の魅力に惹かれ、移住してきた一人だ。

そして、このコンセプトは様々な分野で町を元気にしていくために活用できると考えている。

地域内では、まだまだ砂浜美術館の取り組みが浸透していない部分があることは前述した。この課題を解決していくためには、関わる人たちが思いっきり楽しむことが必要だと思う。楽しんでいることを、伝えていったら、きっと仲間が増えるはずだ。そして、息の長い交流は、それぞれの生活が楽しくなる要素がないと続かない。この地域ならではの交流の形、文化をこれからも模索したい。

（むらかみけんたろう／特定非営利活動法人NPO砂浜美術館事務長）

夏の過ごし方

夏ばての予防と漢方

小松　一

土用の丑の日

土用は、春夏秋冬それぞれにありますが、最も有名なのが夏の土用で、立秋前の十八日間にあたります。一年のうちで最も暑さが厳しく、土用の最初の丑の日に、古来より暑さをしのぐため、様々な行事が行われてきました。

なぜ土用の丑の日なのかというと、五行説において、木火土金水の中の「土」に属す家畜である牛は、梅雨や夏の間に損ないやすい「脾胃」の臓器を養う動物でもあります。そこで、暦の上でも十干十二支と結びつき、「丑」の日が良いとされるようになり、夏の年中行事に加えられたようです。

この日には強い土気から身を守るため、干支信仰から牛を水浴びさせて休ませ、人は「丑湯」と称して入浴し、丑の日の「う」にちなんでウナギや梅干し、瓜等を食べ、土用灸をすえ、土用シジミや土用餅を食べ、土用の虫干し等をしたものです。

鰻の効用

夏ばてした時の食事として代表的なものが、土用の丑の日のウナギです。

ウナギは生薬名を鰻鱺魚といい、味は甘平で、毒を持つとされています。

中国の書物『食物本草』には、「労損（疲労）を治し、腰膝を暖め、陽を起こす。湿脚気（浮腫のある脚気）、腰腎間の湿風痺（関節痛や麻痺の類）で常に水で洗うように覚えるものを療す。五味（酸っぱい、苦い、甘い、辛い、鹹いの五種）を用いて煮て食えば甚だ補益す」と効能の一部に記されています。

ビタミンA、ビタミンB類などの栄養に富み、夏場の強壮食品として価値の高いウナギですが、豊富な脂肪分がかえって暑さで弱った胃腸に負担をかけてしまう事があります。食べ過ぎには注意しましょう。

また、薬味として、脂肪の多いウナギを食すために欠かせない山椒は、山地や丘陵に自生する落葉低木で、若葉をお吸い物や和え物に、果皮を蒲焼などの香辛料に用います。独特の芳香と、強い辛味が清涼感をもたらし、脾胃を温め、湿邪を除いて胃腸の働きを促します。漢方では大建中湯という処方に配合されます。

冷えと飲食の注意

江戸時代の本草学者・貝原益軒は『養生訓』の中で「夏は四季のうちで最も保養すべし。吐き下し、暑気あたり、食べ過ぎ、腹下し、熱の出る下痢を起こしやすい」と述べています。

これに対する養生法として、「夏は陰の気が腹に入り、消化が遅い。暴飲暴食はいけない。温かい物を食べ、脾胃を温めよ。冷水を飲んではいけない。生冷の物はすべて避け、冷たい麺類も多食してはいけない。用心して保養し、体の弱い人は下痢に注意せよ」と記しています。

さらに「夏は、発する気がいよいよ盛んで、汗が出て肌膚が大いに開くため外邪が侵入しやすい。涼風に長くあたってはいけない。また、沐浴後も風にあたってはいけない」とも言っています。

これは現代でも同じ事で、夏場の冷えは病気を助長します。一日中クーラーのきいた部屋にいる人は、設定温度を高めて冷房病を予防し、衣服や飲食物などで体を温める工夫をしましょう。

昔から言われている通り、天ぷらにスイカやメロンなどの冷えた果物、ステーキにアイスクリームといった、脂肪の多い物と冷たい物の食べ合わせは、夏場は避けた方がいいでしょう。

胃腸の働きが鈍っている時に、冷たい物を摂ると、消化作用がストップし、続けて油っこいものを摂る事で、消化不良によるゲップが出て、下痢を起こします。夏の下痢は体力を非常に消耗するため、是非とも防ぎたいものです。こうなった場合、漢方では平胃散がよく効きます。

夏ばての漢方処方

漢方では、夏ばてのことを「注夏病」と称します。夏ばてには、清暑益気湯や六君子湯、白虎加人参湯をよく用います。生後間もない大正天皇の重病を快癒させた名医・浅田宗伯は、清暑益気湯に関して、「注夏病の主剤である。虚弱体質で夏になれば、痩せ細って体がだるくなり、あるいは下痢したり、喘息がおこったりして、手足がほてる者を治す。老人には特によろしい。夏ばてに使う薬はいろいろあるが、大抵の場合、これを服用しながら万葉集に拠ってウナギを食べ、性交を慎めば、寒くなる頃には快復する」と言っています。

ちなみに「万葉集に拠って」とは、大伴家持の詠んだ歌「石麻呂に　われもの申す夏やせに　良しというものぞ　鰻漁り食せ」をさします。土用の丑の日にウナギを食べる習慣は、江戸の安永か天明年間に広まったようですが、七、八世紀頃、すでに「夏ばてにはウナギを食べよう」という歌があったとは面白いですね。

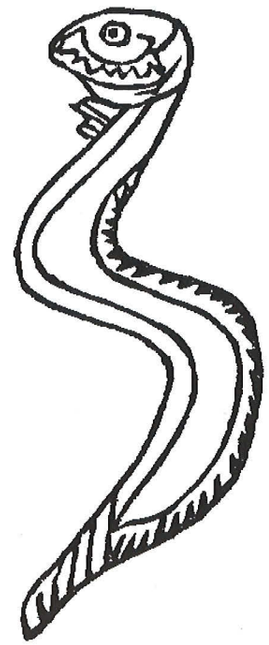
遅く寝て早く起きる

『黄帝内経・素問』は、約二千年前に養生について記された中国の医学書です。その中の四気調神大論篇にこうあります。「夏の三ヶ月は、蕃秀といい、天の気と地の気が交合し、万物も花開き、実を結ぶ美しい季節である。人々は遅く寝て早く起きるべきである。夏の日の長さや暑さを厭うことなく、またリラックスして、怒ってはいけない。植物が花を美しく満開にさせるのと同様に、人は体内の気を外に向かって発散させるのである。これがつまり、夏に適応して養生する道理である」

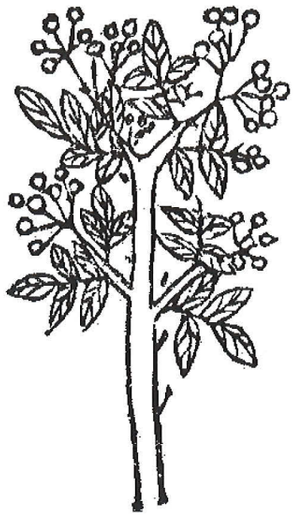
現代の日本社会で、これを実践するのはなかなか難しい事ですが、ちょっとした仕事の合間や夏休みの間に、昔の人の生活様式に近づいてみるのもいいかも知れません。

（こまつはじめ／薬学博士・薬剤師・鍼灸師・いちまる漢方薬局店主）

鰻



椒



地の名もなき偉人たち④

裁判干渉に抵抗、安重根を支えた検察官 安岡静四郎

公文 豪

安岡静四郎は、明治十年十月三日香美郡山北村（現・香南市）に生まれた。三十八年京都帝国大学法科大学を卒業。司法官試補となって名古屋区裁判所に勤務。四十一年検事に任用されて浜松区裁判所検事、翌四十二年十一月二十日旅順法院へ赴任した。

日露戦争後、南満州の権益を手に入れた日本は、旅順に関東 督府を置き、高等・地方両法院（裁判所）を設置した。初代高等法院長は平石氏人。潮江村（高知市）に生まれ、発陽社に所属して自由民権運動に参加。東京帝国大学法科大学卒業後、判事となって各地を転任。関東 督府高等法院長退職後は旅順市長をつとめた。

明治四十二年十月二十六日、伊藤博文はハルビン駅頭で韓国独立運動家安重根に暗殺された。事件直後ハルビンへ飛び、安を訊問し、死刑を求刑した検事溝淵孝雄も、大川筋（高知市）に生まれた高知県人である。溝淵は東京帝国大学法学部（明治三十年に法科大学を改称）を卒業して検事となり、三十九年九月から関東 督府高等法院と地方法院の検事を兼ねていた。安岡の旅順法院への赴任は溝淵の誘いに応じたものだという。

安岡静四郎

日韓併合は安重根の凶行が引き金になったという説もあるが、これは明白な誤りである。この年七月、すでに日本政府は閣議で併合方針を決定し、韓国民は亡国の淵に立たされていた。溝淵検事が伊藤暗殺の理由をただすと、安は閔妃殺害、日韓協約の強要、皇帝廃位、韓国軍の解散など十五の罪状をあげ、韓国の独立と東洋平和への信念をよどみなく答えた。溝淵検事が思わず「その方は韓国のため実に忠君愛国の士」だと感嘆の言葉を洩らしたことを、訊問調書は正直に記録している。

事件直後、外務大臣小村寿太郎は外務省政務局長倉知鉄吉を満州へ派遣、安重根の極刑を指示した。平石高等法院長は倉知の画策で本国政府の意向を受け入れた。しかし、安岡らは政府の裁判干渉に激しく反発し、司法の独立を強く主張した。板挟みになった平石の苦衷は察して余りある。裁判に直接かかわらなかった安岡は、極寒の旅順監獄に端座する安に同情し、職員と金を出し合い、毛布、下着を差し入れた。これをきっかけに、安と安岡は深い情誼によって結ばれる。安の弁護は水野吉太郎（香南市出身、のち政友会代議士）、鎌田正治（鳥取県米子出身。高知市会議員、第二十七代高知県会議長）が担当したが、しょせんは植民地裁判だった。地方法院は死刑判決を下し、明治四十三年三月二十六日、水野・鎌田両弁護士立ち会いのもと安は刑場の露と消えた。

獄中の安重根の人格と思想は、接する者を例外なく敬服させた。水野は生前、「僕は安重根の事を思うと何時も涙ぐむ」と語り、植民地支配のむなしさを説いた。戦時中、安岡もまた「安重根は立派な男だった。深い教養の持ち主だった」と賞賛してやまなかった。「時局柄、初代総理大臣を暗殺した人物をこんなふうに言ってよいのか」。高知市瀬戸に住む安岡の三男の妻・淑さんは、義父の話を聞くたびに肝を冷やしたと回顧する。裁判を傍聴した土陽新聞特派員小松利宗（香南市出身、画家）、警護にあたった警部八木正禮（潮江出身）らも、安の遺墨を得て帰国し、生涯大切に保存していた。

安岡は、その後関東 督府法院検事正となり、大正九年原敬首相暗殺の一因となった関東庁アヘン事件の捜査を指揮。政府の圧力で捜査を打ち切らざるを得なかったことを終生憤慨していた。十二年関東庁高等法院検察官長に任じ、昭和五年欧米各国を歴遊。帰国後は函館、札幌、宇都宮、広島地方裁判所検事正となり、十五年十月大審院検事に補せられると同時に退職。同年広島弁護士会へ入会。二十年八月六日広島市鉄砲町で被爆したが、九死に一生を得た。二十三年広島弁護士会長。その後、同地で長く調停委員や人権擁護委員を務め、二十九年財団法人日本調停協会連合会副理事長に就任。晩年は東京都杉並区に住んだ。白血病治療のため慶応病院にかかっていたが、昭和三十四年七月十日、八十一歳の生涯を閉じた。墓は高知市筆山にある。

獄中の安重根は安岡静四郎のため「国家安危労心焦思 贈安岡検察官」という有名な書を揮毫した。戦後、遺墨は安岡家から韓国へ寄贈された。これをもとに韓国ソウル市南山公園の安重根義士紀念館の庭前に石碑が建立され、現在も日韓友好の架け橋になっていることをどれだけの人が知っているだろうか。

（くもんごう／土佐史談会理事）

スペインの素顔③ ～サン・セバスティアンの章～

門田 彩

マドリードから飛行機で約一時間、スペイン北東部、フランスとの国境付近に位置するバスク地方の町、サン・セバスティアンへ到着する。「ビスケー湾の真珠」として知られる町だが、訪れるまではバスクの町という以外さしたる印象もなかった。

バスク地方といえば昨年末のETA（バスク祖国と自由）によるマドリード空港新ターミナルの爆破テロが思い出されるように、暗いイメージが付きまとう。軍色を感じさせるものが目についたり、抑圧的な雰囲気が支配したりしているかもしれない。そんな風に思って町に出た。

しかし、そんな思い込みは見事に裏切られた。陰鬱な雰囲気は微塵も感じさせない、緑豊かな美しい町だったのだ。それもそのはず、現在では国際的な映画祭やジャズフェスティバルが開催される文化的な町であり、また美しいコンチャ湾を目当てにスペイン内外から多くの人が訪れる高級避暑地なのだ。

ただ、町を歩いているとスペインの他地域とは異なることが一つだけあった。それは、看板や標識の「文字」である。独自の文化を持つバスク地方は、言葉も文字も独自である。町を歩くと、そこ彼処で見慣れない文字が目に入ってくる。そして、この字体が、フランスが近いせいであろうか、とても洒落ていてかわいらしくセンスを感じさせる。これは、自由で新しい文化の街バルセロナ以外のスペインの町では非常に珍しい。

町の中心部からバスで二十分ほどの所にエドゥアルド・チリーダの美術館「Chillida Leku」があるというので行ってみた。エドゥアルド・チリーダ（一九二四～二〇〇二）とはここサン・セバスティアン出身の彫刻家で欧米各地に野外彫刻を置いていることで有名だが、日本での知名度はまだ低い。だが去年、日本でも大規模な個展が開かれたことにより徐々に知られつつある作家である。

美術館と言っても、一見すると緑に囲まれた公園のようである。適度に整えられた芝生、面白い形の背の高い木、どこまでも深く続く森。実に心地よい空間が広がり、この雰囲気と完全に調和した作品が所々に置かれている。素材は金属や石であるが、それらは物体として屹立するというより、周囲の木々との対話が感じられる。中央には小さな歩道がしかれていて、それをたどっていくと少し立派な石小屋のようなかわいらしい家がぽつんとあった。これが美術館の建物である。中はログハウスのような空間になっており比較的小さめな作品が展示されていた。

チリーダの作品には基本的に素材の色以外はない。過剰な色彩で人々の心を動かそうというのではなく、自然に近い色合いが用いられている。だが素描や習作をよく見ると、その親しみやすさとは裏腹に、自らの肉体を内へ内へと巻き込むという形への執着が感じられた。そこにはあらゆるものを内包する寛容さ、抱擁感があった。周囲と対峙するのではなく対話し、調和を試みること、それが物のかたまりという作品になっている。そして、その対話部分が立体作品の空隙を生み、全体にどこかユーモラスさを与えている。しかしながら、決して軽薄になることなく物体としてどっしりとした存在感をもつため、観た者に強い印象を残す。それも、不快な感覚ではない。共感できる心地よさをもつ。

バスクに生まれたチリーダは何を問いかけているのだろうか。異民族が共存する難しさ、不安感、そしてそれらを包み込むということ、あるいはそれらと対話し、調和するということ、そしてその行為を客観的に捉える寛容さ、その意味……作品を前に、私は様々な思いをめぐらせた。

全三回にわたり、私のみたスペインの素顔を書かせてもらった。長い歴史の中で複雑な道を歩んできたスペイン。それゆえに各地方により実に様々な顔があった。

なにもフラメンコや闘牛だけがスペインではない、と留学前からわかっているつもりでいた。が、実際は、この目で見るまではこの国について全く理解していなかった。スペインはよく地方ごとに「国」があるといわれる。一国の中に様々な民族の様々な文化が融合し、それらが共存して幾層もの多様性をはらんだ国、スペインがそのような国であったことを私は知る。

このことはまた世界のどの国に対してもいえよう。一面的な理解だけでは永遠に分かり合えない。世界がみな自国主義に走るなか、真に平和を希求するのであれば、気に食わないからといって攻撃するのでは全く解決にならない。それぞれの国が、他国を真に理解しようとすることが、平和への第一歩となるのである。

（かどたさい／東北大学大学院博士課程後期）

言葉の現場から④

ことば、言葉（一）
―ハンドの底の―

西岡寿美子

わたしの住んだ一地域だけのことだったかも知れない。小学生の頃、連れ立って登下校の際など、何かというと口を揃えて、

「言い損ないも聞き損ないもハンド（半胴甕）の底の抜け損ない」

と囃していた。どういう場面でかというと、相手の問いを取り違えたり、答えが的はずれだったり、いかにも言葉足らずで要領を得なかったりすると、一斉にこれを浴びせたのである。つまり、不適切な表現を集団でからかったことになる。

言語感覚は、知能の未発達な小学校低学年でも案外に鋭い。大人は多少意味が怪しくても推察で補うが、子供はわずかな不審も容赦しない。「ハンドの底」の一綴りは、いま考えても意味が曖昧で、一種の呪文である。しかし、その判らなさを隠れ蓑としたのであろう。

真っ正面から審問されると、子供でも自尊心が傷付いてヘソが曲がる。「ハンドの底」では怒れないではないか。くすぐりや、重ね言葉や、ナゾナゾや、挑発の混じったざれ歌で、半分遊びながら、子供は言葉だけでなく、社会のルールを覚えるのである。

文―書き言葉と、会話―おしゃべりとは、成り立ちというか、言葉の出どころ、置き方が違う。意識の底で整合し、抽象化、普遍化する時間的余裕のある書き言葉。その場限り、思考も機転も相手次第の会話。どちらも、深く考えると、「丁度ぼっちり」、過不足なしにし了（おお）せるのは難しい。

例えばテレビなどで、司会者がお年寄りにいきなり「奥様はお達者ですか」と問う。すると、口許に差し付けられたマイクとカメラにのぼせて、「ハイ、お達者でございます」などと、遜（へりくだ）りと敬語をまぜこぜに答えたりする。

ところで、物書きの端くれであるわたしは、交換の書誌も多く、言葉には多く接している部類だろう。机（き）辺（へん）は贈られてくるそれらが積み上がり積み上がりし、居住空間は日に日に狭まる。だけでなく、夜中に恐ろしい音がして崩落したりする。何とかしなければと思うが、重いし、カサ張るし、紙の重さでしか引き取られないこれらが、多くは身銭を切った出版物であることを知る身には、売り払うにも忍びない。

話が本旨から外れた。実はこの受贈本に、書き手が添えてくる挨拶文の不思議さを、ご披露したかったのである。一例は、

「…何とぞよろしくご拝読下さいますよう」

いま一例は、

「…ご好評を賜りますよう」

とあったのには、目が点になった。これが一度ではないので、ツムジが曲がったのである。著書を贈って来るくらいだから、一応、文筆に携わるプロ、セミプロ級の人であろう。

それを言うなら、「ご高覧賜りたく」とか、「お目通し下されば」、であろうし、会ったこともない人に、「ご高評を」願わず、「ご好評を」最初から要求するとは、いかに何でも厚顔に過ぎはしないだろうか。

ワープロ、パソコンは、時折、奇怪な熟語を呼び出して爆笑を誘うが、これらは電脳ではなく、れっきとしたご本人の手跡であった。かりにも言葉で勝負する人である。お粗末に過ぎはしないだろうか。

（にしおかすみこ／詩人）

高知市文化プラザ かるぽーと
5月～6月の事業のご報告

高知のまんがあれこれ展

4月28日から6月17日にかけて、昨年度高知で行われたまんがコンテストの入賞作品などを紹介した「高知のまんがあれこれ展」を開催しました。「まんが甲子園」の歴代最優秀作品をはじめ、「黒潮マンガ大賞」、まんがの日記念「４コマまんが大賞」、日曜市130周年を記念した「日曜市まんがコンテスト」の入賞作品や、高知で活動するＮＰＯマンガミット、高知まんがグループなどの発表作品179点を展示し、訪れた観覧者は、1コマや4コマ、ストーリまんがなどの多彩な力作の数々を楽しみました。

高知市展

アンデパンダン（公募・無審査）の美術展として親しまれている高知市展が、5月26日～6月10日まで開催されました。

今年は、絵画、日本画、書道、先端美術、彫塑、陶芸、工芸、写真、ペン字、デザインの10ジャンルに、16歳から93歳までの計590名の作品、計714点が出品されました。去年に比べ出点者数が69名増、出品点数も73点増えました。

発表と鑑賞の場の提供として半世紀以上続いている高知市展は、美術の楽しさや面白さを市民に根付かせようと、これからも種を蒔き続けていきます。

わいわい！こども音楽会

子供と一緒に鑑賞できる「わいわい！こども音楽会」が6月9日にかるぽーと大ホールで開催されました。年に一度開催される人気の演奏会も今年で四回目。地元高知の実力ある吹奏楽団、高知フライデー・ウィンド・アンサンブルと鏡野吹奏楽団が出場し、アニメや童謡といった子供が大好きな楽曲をたくさん演奏しました。また「指揮者に挑戦！」などの観客参加コーナーも好評で、子供達はにぎやかで楽しい時間を過ごしました。

詩のボクシング　予選会

ボクシングに見立てたリングの上で、朗読者（朗読ボクサー）が自作の文章を発表し、どれだけ観客を惹きつけたかを競い合う「詩のボクシング　高知大会」の予選会が、6月16日にかるぽーと小ホールで開催されました。個性豊かな32名の朗読ボクサーの中から選ばれた16名が、7月14日にかるぽーと小ホールで行われる本大会への切符を手にしました。

10月6～7日には全国からチャンピオン級の朗読者が集う「選抜式詩のボクシング　全国大会」が、かるぽーと大ホールで開催されます。

高知を撮る

ホテイ草繁殖

（昭和54年　五台山下絶海池）

国沢　隆義

春は弥生の花影に
潮の香高き美国
古城の陵（おか）やあの街に
頭（こうべ）に白き二条（ふたすじ）を
誇りし頃のけがれなき
真白き心帰り来ず
あの日　あの宵
あの南に過ぎし
あの空　あの洋（うみ）
あの南に青き

旧制高知高等学校の数多い寮歌の中でも、とりわけ心に沁みる「慕南歌」（一九三二年、海野稔作詞、高井祥平作曲）である。

いたずらに昔のエリート教育を賛美しているわけではない。ただ、この歌の背後に流れる、悠然とした「時の流れ」を感じてほしい。そして、このような流れの中から有能な若者が育っていったことに思いを馳せてほしい。

対照的なのが、今の学校現場である。「ゆとり」教育の掛け声はどこかに消えて、先生方は、次々と現れる新しい課題に追い回されて、ゆっくり物事を考える暇もない日々を送っている。官制研修、勤務の評価、職務命令。ぴりぴりする空気の中で、今度は「期限付き」の教員免許状である。片や、生徒は「飛び級」制度を拡大しての促成栽培？を目指すという。

近頃、政界や経済界には、教育を「人材」という製品を作り出す、単なる製造業と見なす風潮があるようだ。かくて、学校は「工場」になり、国際競争力をつけるために「生産性」も要求される。

教育の世界には効率万能主義も市場主義も馴染まない。伸び伸びとした環境の中でこそ、可能性を秘めた若者が育ってくる。現場には、できるだけゆっくりと時が流れてほしい。そのような環境を作るのが政治の責任である。

因に、英英辞典で「school」を引いてみよう。この言葉は「leisure」を意味するギリシャ語に由来するとある。そこで、英和辞典で「leisure」を引くと、そこには「自由な時間」とか「余暇」のことだと書いてある。

（路）

「スクール」

風俗歳時記

景観考

タケムラナオヤ

高知駅の高架化工事がいよいよ大詰めなのである。そして、それと共に見えてきたのが、新しいけど既に混沌とした北口の町並みなのである。

行政の人に聞けば、特に景観のコントロールは何もしていないのだとか。土佐伝統の技術や素材を少しでも使うようにするとか、高さや壁面ラインを少しは揃えるとか、何か「街の顔」としてのありようを探ってみるのも仕事だろうと思うけど、どうやらそんな時間はないようだ。

そもそも、高知は景観にうるさくない。北山が見えなくなろうとも、お城が見えなくなろうとも、意外と市民は無関心なままだ。江戸時代の掘割に蓋をするといっても、はりまや橋公園が「数多の人々の意見を取り入れて」無国籍な公園に仕上がったとしても、かるぽーとがMUJIの炊飯ジャーに似ていても、どこまでも冷静に受け止めている。

高知の街を歩いていて高知らしいと思える瞬間は、たとえば日曜市やよさこい祭りのような街の「使い方」にあって、景観という街の「見え方」で唸らされる場面は少ない。あるとすれば、たとえば鷹匠公園から鏡川へと出る坂道や、追手前高校の時計台と追手筋のような、少なくとも戦後復興の時期までに成立した景観ばかりだ。

というわけで、次回から、高知の景観を形成する事象と、その背景を考えていく。

MUSEUM SHOP
Kochi-City Culture Plaza CUL-PORT

Original goods Artist goods Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動を続けている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田２－１
高知市文化プラザかるぽーと３階
Tel 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）

今号の表紙

「チューリップ」

中山康子

小学生の頃から絵が大好きで風景画と静物画を習い、今回は本格的にパステル画を横本先生に習い始めました。このチューリップの花びら一枚一枚が懸命に咲こうとする力に魅せられて、パステルと色鉛筆で表現してみたかったのです。これからも花のやさしさと、エネルギーのある絵を描いていきたく思っています。

（なかやまやすこ／主婦）

風俗

地名の持つ文化

運転免許証の書き換えに行って気が付いた。吾川郡池川町であった本籍地が、仁淀川町に変わっていたのだ。

平成の大合併劇の一環だ。改めて合併のメリットを問う気もないが、伝統のある故郷の、慣れ親しんだ地名がなくなるのは寂しいものだ。町名に付随して、やがては山の襞々に息付いていた小字も忘れられていくのだろう。

池川の山間には、平家落ち武者の伝説が豊かで、それにちなんだ地名も多い。私の育った集落にも、カクレジク（武者集団が潜んだ土地）、ウバガタニ（貴種の乳母が住んでいた所）、イズマロ（出丸と書く、野戦の砦跡だろう）、イノタニ（源平の戦いの後、流血が谷となったので、血之谷と名付けられた。現在は伊之谷と呼ぶ）などなどの地名が残っている。

地名には村人の血脈に語り継がれてきた物語があるのだ。豊かな感性を支えるロマンが、地名の忘却と共に消えてゆくのは文化の危機であろう。

老人一人が亡くなると、地域の図書館が一つ消えるのに等しい、という話もある。早急に、お年寄りの記憶が活きている内に、聞き書きなどの取り組みを起こし、謂われのある地名を掘り起こして欲しいものだ。

（3）

文化高知 No.138 [隔月発行]
2007年(平成19年)7月1日発行
財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)/郵便振替01680-5-14869

横山隆一記念まんが館開館5周年記念企画展

横山隆一・手塚治虫 二人展

～フクちゃんからアトムへ～

2007年7月14日(土)～9月24日(月祝) 9:00～18:00

● 場　所…… 横山隆一記念まんが館企画展示室

横山隆一「フクちゃん」（高知新聞『鎌倉通信 其の二』表紙絵）

● 休館日／毎週月曜日(但し、7月16日、9月17日、24日は開館)

● 観覧料／

二人展観覧券：一般500(400)円　高校生以下無料

常設展＋二人展セット券：一般800(640)円

※( )内は団体料金(20名以上)、65歳以上は半額

※香美市立やなせたかし記念館 アンパンマンミュージアムの企画展「手塚治虫文化賞10周年展」期間内の半券を持参された方は、団体料金で観覧いただけます。

近代日本まんがの創始者の一人・横山隆一。ストーリーまんがの開拓者・手塚治虫。二人には、意外な接点がありました。

治虫は「フクちゃん」を模写してまんがの練習をしたといい、隆一も、審査を務めたまんが賞などで治虫を高く評価しています。

本展では、二人の代表作を中心に、互いの評価を交えて展示すると同時に、同じテーマでの競作や、漫画集団での活動など、その交流の様子も紹介します。
まんが史に名を残す二人の競演をお楽しみください。

手塚治虫「鉄腕アトム」（『カッパ・コミクス 鉄腕アトム6』表紙絵）
©手塚プロダクション

関連企画

藤子不二雄Ⓐ＋鈴木伸一
対談「横山隆一と手塚治虫」

日時●8月5日(日) 13:00～
場所●かるぽーと 2階小ホール

参加料 無料

協力企画

手塚治虫文化賞10周年展

期　間●7月4日(水)～9月3日(月)
時　間●9:30～17:00(最終入館16:30)
場　所●香美市立やなせたかし記念館 別館
休館日●7月10日(火)・17日(火)
入館料●大人700円・中高生500円
小人300円(アンパンマンミュージアム・詩とメルヘン絵本館との共通券)

※「横山隆一・手塚治虫二人展」の半券を持参された大人の方は、団体料金で観覧いただけます。

お問い合わせ先●
(財)アンパンマンミュージアム振興財団
TEL：0887-59-2300

主催●(財)高知市文化振興事業団 横山隆一記念まんが館
協力●手塚プロダクション・宝塚市立手塚治虫記念館
お問い合わせ先
〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化プラザかるぽーと内 横山隆一記念まんが館
TEL:088-883-5029 FAX:088-883-5049 URL:http://www.bunkaplaza.or.jp/mangakan/

横山隆一記念まんが館 YOKOYAMA MEMORIAL MANGA MUSEUM